

VOL.
19

保存版

町雑誌

千住

SENJI

特集 ■ 千住の仕掛け人—甦る歴史編—①

新連載

ときどき散歩ドキドキ散歩 ■ 千住のいえ

連載

千住の思い出 ■ 千住の町 12

千住タイムトラベル 10

TVフリーカード振り返る千住のヒーロー 2004

新千住人フレッシュチ4

価格300円 Machi-Zasshi Senju

歴史はつくるもの

●旧日光街道入口

又、会では、旧日光街道入口にあたる東京都卸売市場足立市場敷地内のコミュニティバス「はるかぜ」のバストップに「やつちやば」のセリ場で使われていた御影石を敷き、芭蕉石像建立を提案した。地元坂本石材店（坂本俊明氏）によってふんだんな石使いの立派な空間が出来上がり、案内高札では高浜虚子命名の「やつちやば句会」主催の為成菖蒲園も紹介している。除幕式は大いに賑わって、千住の人々の交流の厚さもかい間見えた。



●やつちやば通り

大賑会の中心となっている岡本行央氏は、現在のやつちやば通りを演出したことでも知られている。伝聞より、実際に目に見えるものは説得力を持つ。

空襲で、ヤツチヤバの町並みはほとんど失われ、全く様子の変わった通り沿いの各家の前に、屋号と扱い品を記した木製の看板を付ける提案をし月日をかけて実行した。ヤツチヤバの様子を示す図や「千住葱」（ここだけは江戸時代から今も市場として続いている）

の説明なども含まれる。（本誌12号に掲載）

今では誰もがその通りを「やつちやば通り」と呼び、千住の名物通りとなつていて、この活動の成果が更に発展して「千住大賑会」発足の因となつたと推測できる。

●千寿七福神

「歴史はつくるもの」という名言は「千寿七福神の会」永見富次氏から伺つた。千寿七福神の生みの親であり、育ての親である。苦労を重ねて一九九三（平成五）年から始まつたものが、今では千住の正月には欠かせないものとなつていて。（本誌9号に掲載）本水川神社（千住3-22）大黒殿横には千寿七福神の碑が建つ。



●まちの記憶を伝え続けたい

手前事になるが「千住・町・元気・探險隊」は千住に残る蔵の多さを発信し続けた。蔵を核とした「ウォーカラリー」や「まち歩き」の主催で伝えたかったのは、古い物をいとおしみ、大切に使い続ける姿勢が、生涯現役で過ごすことのできるまち「千住」のひとつシンボルと考えたからだ。まちの記憶を繋ぎ続けることは「町雑誌千住」の重要なテーマの一つでもある。

再開発で消えた蔵の梁材や煉瓦など、いただいた廃材を、再活用してまちに置きたいと考えた。ベンチなどに姿を変えた「まちの記憶」は今少しずつ増えている。



会員用の昌益文庫を設けて、図書館でも見る事が出来ない貴重な本を読む事ができるようになつた。講談師桜井琴桜さんによる「安藤昌益発見伝」

を仲町氷川神社で公演したりと活発に宣伝している。

「北千住の仙人」と呼ばれた橋本律藏家墓石の拓本をとつたり、地域の古地図を調査す

るなどから、新たなことも解明されつつあり、近々大発見の一ページをめくることが出来るかもしれない。

●千住宿を楽しく学ぶ

舞台となる千住町に生まれ育つた相川謹之助氏を会長に、チヨーテーとして石渡氏、安藤氏（兼通信編集長）に、事務局長の矢内信悟氏の名カルテットに加えて、逸物の会員揃いなのが頼もしい。僅か一年で会員は50名を超える今年秋には八戸を訪問して、近い将来には千住で全国シンポジウムを行う予定になつていて。関係を調べる会なので、

講演会やまちあるき（会員以外の参加も可）で千住宿の勉強が出来ることも魅力だ。足立の歴史を語るには右に出る者がいないと云われる安藤氏が、直々に語つてくれる千住宿の特徴は、たっぷりの余談と共に聞

く者をうならせててくれる。

■ヤツチヤバ

千住河原町といえはヤツチヤバであつた。ヤツチヤバの起源については、明らかではないが、河原町稻荷神社の境内に千住青物市場創立三百三十年祭記念碑（明治三九年建立）がある。この記録に従うと市場解説は開設一五七六（天正四）年にあたるが、あくまでも語り伝えをもとにしたものである。實際は各地に残る朝市のように、何時ではなく自家製の野菜や川魚を道端に並べて商売を始めたのが起りであろう。市場開設を何時からと断定するのは大変難しいことである。

「風土記」（天保年間編）によれば、物資が大量に出回り、専門店相手の問屋根、芋などが納められていたことが分かる。納品時は、大名列でさえ、その前を横切る事ができなかつたという。

「千住市場議定書」（八四七（嘉永元年）の末尾には三八人の問屋衆が名を連ねている。大正期には三三二軒、昭和一六年の市場合併の際は三〇軒であった。

千住ヤツチヤバは他の東京府内の市場（神田、浜町、日本橋など）に比べ、投師という特殊な流通機構を持つていた。千住の問屋でいち早く仕入れた商品を高価に引き受け、それを市場へ出荷する商売をする者である。投師の働きによって千住市場へ集中した農作物を、東京中に流通させる仕組みが成立していた。

江戸中期の医師であり、思想家だった安藤昌益は、戦後、岩波新書で、「ハーバートリノーマン著『忘れられた思想家』上・下、および「ハーバートリノーマン全集」で紹介されて、俄に注目された。この昌益は、江戸時代の封建社会に批判的立場をとつていた為に、その生涯と足取りは不祥で、今日にしてはじめて研究者によつて、秋田の大館の人で八戸で活躍していた事など解明されつてある。もともと昌益の大著である「自然真言道」の稿本一〇一巻九三冊は、千住宿橋本に代々秘蔵されていたのを明治の末に、京大総長狩野亨吉に依つて発見され研究の途上にあつた。しかし、この稿本は関東大震災で焼失してしまつた。ところが第二五「良演哲論」を含む一二冊がまたま借り出されていたために焼失を免れ、現在は東大図書館に架蔵されているが、八戸の旧家や京都大学にも昌益の写本が所蔵されていることが分かり、京都大総長狩野亨吉に依つて発見された本は橋本律藏家で、なぜこの家に稿本があつたか、また、「千住宿並圖」（織畠文書）にある「医師・橋本玄益」とは昌益との繋がりを思はせ、研究者は今まで千住に注目している。



史談文庫3
安藤昌益
一人と思想と千住宿
足立区郷土資料刊行会編
頃価300円

●安藤昌益つてだれ？

春氣な展開のようだが、実体は素早い。ハーバートリノーマンが「忘れられた思想家」として紹介し、司馬遼太郎が「日本で唯一の独創的思想家」と絶賛し、昌益の名前を教科書で見た記憶はあって、一般になじみはない。石渡博氏が解りやすく書き下ろした文を、安藤義雄氏が「史談文庫」の一つとして編集・発行の会事務局090-515208-2950の他、千住の一部の書店でも扱つてい

るエコロジーの先駆者と呼ばれる由縁がよくわかる。更に自然食レストランとして知られる「椿屋2」（千住1-33-4）に

千住の人々の交流の厚さもかい間見えた。



又、会では、旧日光街道入口にあたる東京都卸売市場足立市場敷地内のコミュニティバス「はるかぜ」のバストップに「やつちやば」のセリ場で使われていた御影石を敷き、芭蕉石像建立を提案した。地元坂本石材店（坂本俊明氏）によってふんだんな石使いの立派な空間が出来上がり、案内高札では高浜虚子命名の「やつちやば句会」主催の為成菖蒲園も紹介している。除幕式は大いに賑わつて、千住の人々の交流の厚さもかい間見えた。



又、会では、旧日光街道入口にあたる東京都卸売市場足立市場敷地内のコミュニティバス「はるかぜ」のバストップに「やつちやば」のセリ場で使われていた御影石を敷き、芭蕉石像建立を提案した。地元坂本石材店（坂本俊明氏）によってふんだんな石使いの立派な空間が出来上がり、案内高札では高浜虚子命名の「やつちやば句会」主催の為成菖蒲園も紹介している。除幕式は大いに賑わつて、千住の人々の交流の厚さもかい間見えた。

又、会では、旧日光街道入口にあたる東京都卸売市場足立市場敷地内のコミュニティバス「はるかぜ」のバストップに「やつちやば」のセリ場で使われていた御影石を敷き、芭蕉石像建立を提案した。地元坂本石材店（坂本俊明氏）によってふんだんな石使いの立派な空間が出来上がり、案内高札では高浜虚子命名の「やつちやば句会」主催の為成菖蒲園も紹介している。除幕式は大いに賑わつて、千住の人々の交流の厚さもかい間見えた。

江戸の文化は千住にあり

千住は江戸四宿の一つであり、日光道中の初宿でもあった。千住橋戸町には船着場があり、関東を始めとして日本各地の産物が陸揚げされ、千住掃部宿市場から、江戸や地方に出荷された。米穀問屋、青物問屋、川魚問屋などの市場が成立し、家内工業が起り、下駄や帆、紙煙草人、地漉紙などの产品、産物が知られている。経済力と、江戸府内の様な規制を持たない自由な空気が、多様な文化を産み出した。

●伊豆の長八の傑作

「千住仲組協議会」(略称「千仲会」)は、千住宿北組に対し掃部宿が千住宿中組と呼ばれたことにちなんで名付けられた。健全で明るい地域の創造とその向上発展に寄与することを目的として、千住南部の人達が中心となつた会である。職安問題の改善や防災イベント開催に眼を向ける他、文化遺産の保護育成事業として、千住大橋近くの橋戸稻荷神社(千住橋戸町35)土蔵造りの本殿扉、漆喰の傷みが気になった。内側にあるのは「伊豆の長八錆絵」である。作品の中でも傑作と言われている。

毎月の例会は、同神社手前の神社会館を借りて開催されていた。(余談だが強制はないのに会員は必ず社殿を詣ってから会館に入る。根っからの千住っ子の氣風だろうか)

●千住酒合戦の再現

建部巣兆は江戸の多くの文化人と交流があり、「千住酒合戦」が立役者揃いだった由縁と言われる。酒合戦が催された頃、巣兆は既にこの世の人ではなかつたが、それだけに尚更、同時開催は労力が大変だけれど意味ある事と同会は考えた。

江戸文化の結集であると言われても、内容は飲酒の量を競うことで再現にも限りがある。足立区教育委員会との共催でもある。当時の酒は濁り酒で、4倍ほどに薄めて飲んだのだという。昔ながらの手法でつくる酒造も見つけたが、発売されたばかりの清酒「千住」の樽にした。

●江戸人になつてみる

看もおそらく一流の味であつたろう。千住宿模型の監修者でもある、日本工業大教授の波多野純氏から資料の提供を受けて、それをヒントに、足立市場内で寿司店を営む塚越利光氏が再現を試みた。(形も美しく、とても美味しかった)

会場は日光街道(4号線)に面した河原町稻荷神社の境内。紅白の幕を張り、銀杏

修復には通常莫大な費用がかかるという

が、調査を続けるうち伊豆松崎の長八の孫弟子が快く引き受けてくれるという幸運に恵まれて、修復と同時にレプリカを三セット作り、(本誌10号「千住史上の職人」で紹介)

この一件は地域町会と合同の「千住大橋周辺のまちづくりをすすめる会」の活動となつているが、メンバーとして多く動き、活躍している。今も伊豆松崎との交流は続いている。

●関屋の里の建部巣兆

「千仲会」の勝村

英世氏は、表装の仕事柄、芸術作品とは馴染みが深く、歴史にも詳しいことから

自身も「巣兆コレクター」であった。巣

兆は文人画家として、むしろ海外の評価が高いという。

千住に在住してい



盆踊図
足立区立郷土博物館蔵

蟹狩図

江戸三大俳諧師 建部巣兆展

第五回

05年10月3日～5日

於シアター一〇一〇ギャラリー

10/3 13:00～19:00
10/4 10:30～19:00
10/5 10:30～17:00



諸家飛脚問屋中屋。店の横から奥座敷を覗く／千住宿模型より

酒合戦の様子「高陽闘飲図巻」
より／千住仲町内田丈司家蔵



■酒合戦

千住の文芸誌上で著名なのが、多くの文人た

と、03年に「建部巣兆展」の開催を思い立つた。同会主催で「千住宿歴史アチテラス」で各所から集合した作品展を開催する。青竹で結界を組み、ガラス越しでなく作品を見る事の出来る、贅沢な展示であった。

■千住の酒合戦

一七六年後の一八一五(文化二二)年一〇月

二日、千住二丁自問屋場前の諸家飛脚問屋の隠居中屋の隠居六右衛門「中六」が遷暦祝いに酒合戦を催した。勘進元は中六の呑友達の幹人、鯉陰(坂川利石衛門・青物問屋坂川屋)が引き受けた。鯉陰は千住の俳人建部巣兆の門下で絵を描き、酒井抱一と親交があった。千住に遊びに来た鶴齋(坂川利石衛門)なども親交があり、江戸市中の文人らを来賓として招いた。その顔ぶれは鶴齋自身をはじめ、谷文晁、大窪詩仙、市河寛齋、酒井抱一など知名度の高い人達であった。竹塚村出身の文人、竹塚東子も来賓に加わっている。

■高陽闘飲図巻

当日の酒合戦の様子は「高陽闘飲図巻」にまとめられている。同書は一八一六(文化二三)年以降に成立したと推定される絵巻である。図巻の構成は鶴齋による序文(「高陽闘飲序」と、蜀山人による「後水鳥記」、詩仙の「題酒戦図」)、対応の跋文から構成されている。

このうち「後水鳥記」は、酒合戦の様子を詳細に伝えた記事であるが、蜀山人は出席していないが、翌々年に、源長寺で披露されたことも記録されている。

■建部 巢兆

巣兆は文化文政の文化華やかなりし頃、千住宿はいずれの関屋の里に住み、俳画に長じた江戸三大家に数えられた俳諧師である。

一七六一(宝曆二)年正月、書家山本章兼(伊豆長八美術館)に納めることが出来た。現在も伊豆松崎との交流は続いている。

この一件は地域町会と合同の「千住大橋周辺のまちづくりをすすめる会」の活動となつていているが、メンバーとして多く動き、活躍している。

今も伊豆松崎との交流は続いている。

子として江戸日本橋本石町に生まれた。父が白井鳥酔門下で俳句を嗜んだに影響され、俳句に親しみ加藤白雄の門に入り、その八弟子といわれた。寛政の初め藤沢家の養子となり、千住関屋に住む。

氏姓を建部と名乗り、名を英親、字は族父、巣兆、菜翁、秋香庵と号した。夏目成美、鈴木道彦とともに江戸俳諧三大家といわれるようになり、亀田麗翁・酒井抱一など江戸一流の文人墨客と親交があり、絵を初め雪舟流を称する桜井雪館に、後に大和絵の住吉内記に学んで、一境地を開いた。洒脱で機知に富んだ俳画は谷文晁らの文人画に並び評されている。

千住にあっては、月並み俳句の点者や俳画、生け花の指南で生活していたと思われ、巣兆を慕つて千住に住むものもあり、成美、道彦、士郎、一茶、乙一等と交流をもちつ多くの句集などを秋香庵から刊行し、俳諧集団「千住連」の形成に大きな影響を与えたと考えられている。

著作に「二箇集」「徳万藏」「せき屋(う)」「吉祥福天女」「老が染飯」「仙都紀行」「うさぎむま」「小がはら」「小実あわせ」等、また、没後には句集「曾波可理」追善集「星の林」「谷篇集」がある。一八一四(文化二)年一月十七日に享年五四歳で没し、墓は浅草北寺町の日輪寺にある。

関屋の巣兆として知られたが、その住居については居所を直接示すものは未発掘である。

日光道中は英語でサンロード

旧道に面した、日光道中を意識した名称の「サンロード」は、今では「宿場町通り、宿場通り」と通称されているが、中間に4号線（現日光街道）まで伸びる道路も含めたTの字型の商店街だ。特に歴史を感じさせるエリアではあるが、北千住サンロード商店街振興組合で平成9年から発行のサンロードマップが素晴らしい。B3版四つ折りのそれぞれが特集となり、千住の歴史をわかりやすく解説している。編集は「サンロードマップ委員会」核となる山崎 健氏は「千住宿商店街ガイドブックj u j u」の編集長でもある。

第一号（平成9年発行）は、めでたく「千住七福神」マップに加えて近隣の寺社の特徴を説明案内している。
第2号（平成10年発行）は、東武鉄道開業百周年を記念して「鉄道と駅」馬車鉄道があつたとは驚かされるが路面電車は昭和43年まで活躍していた。

第3号（平成11年発行）はサンロード創立五十周年を記念して「北への初宿・千住宿」として寺社以外のものを紹介している。千住大橋は両国橋よりも60年古いというような記述が、わかりやすさの所いか。

第4号（平成13年発行）は「千住にあつた映画館」を記念して「千住町尽し」。千住の町名とその由来等として寺社以外のものを紹介している。千住大橋は両国橋よりも60年古いというような記述が、わかりやすさの所いか。

伝承遊びを伝えたい

かつて、原っぱや道ばたで繰り広げられた子供達の遊びが懐かしい。手作りや、駄菓子屋で売られている簡素なおもちゃを使って子供達は、日が暮れるまで元気に良く遊んだ。幼い子供は「おまめ」と呼ばれてハンデをもらい、一緒に遊ぶ事が出来た。そういった思いやりや、付き合いの積み重ねが、今の千住の暖かさをつくったと思う。

●遊びまつり

賑やかな子供達の声が聞かれなくなつて久しいが、「子供を育む地域連絡会」では毎年二月に千住公園（千住大川町35）三世代交流の「あそびまつり」を開催して、かつて現役だったお父さんやお母さんが、昔と躍如している。大型手作りの紙相撲、（写真上）千寿かるた取り、ペーロマやこま、メンコや剣玉、ビー玉など技を磨いて競い合う遊びから、幼児にも参加できる「はないちもんめ」「だるまさんがころんだ」など。お手玉、竹馬、石蹴り、ゴム跳び、ままごと、紙芝居、その他ありとあらゆる懐かしい伝承遊びが網羅されて



公園いっぱいに繰り広げられる。家族内のコミュニケーションが危うい現代では、遊び方を知る以上に、量り知れない効果があることを感じる。

●和凧の百花競乱

かつては正月になると荒物屋や駄菓子屋の店先には奴凧や武者絵凧が賑やかに並んで、年の瀬を感じさせた。公園や空き地には、細長く切った新聞紙の尾を付けた凧が高く揚がり、凧揚げ名人がいてコツを教える。懐かしい景色である。

現代は、九月初めの土曜日に荒川の空いっぱいに、思い思いの絵柄の小学生の手作り和凧が浮かぶ。（写真下）これは夏休みの体験学習として、手漉き

■千住の凧
千住では、凧骨用の竹を扱う専門店があり、自家製の凧を売る店もあった。凧絵師も近年まで千住に住んでいたと聞く。千住絵馬吉田家でも今井龍谷など凧絵師の描いた凧を売っていた。戦前は、現在千住スポーツ公園のある緑町一帯の広々したところが凧揚げの場所として賑わった。その後は都市化の進展につれて空き地も少なくなり凧揚げも衰退していった。1965年（昭和40）年に荒川河川敷の千住新橋グラウンドで凧上げ大会が開かれ、いつ頃まで続いたかは不明だが暫く途絶えていたといふ。

持ち寄る仕組み。

の和紙と和竹を、区内三年生以上の小学生三千名近くに配付。家族と工夫しながら作り上げて、新学期に荒川河川敷「虹の広場」に持ち寄る仕組み。

当日会場には、フォローできるスタッフも待機して必ず楽しめる工夫もされている。和凧を揚げるこの出来の子供が年々増えることは何とも頼もしい話しだ。これは「足立凧まつり実行委員会」による「足立凧まつり」で、2000年から毎年開催されている。多くの組織の集合体となるが、実施には千住人の力が大きい。

さらに、画家伊藤晴雨（明治13～昭和36）が描いた「千住十題」のうち「千住の名物」に「千住骨の凧 その他」があることから、名物の再現という意味でも紹介した。



画館」付録として戦前戦後の映画「ログラムの写真」が添えられる。

第5号（平成15年発行）は、開宿四百年を記念して「江戸四宿競」。千住の特徴が浮かび上がる。

第6号（平成15年発行）は、昔の地名大特集「千住町尽し」。千住の町名とその由来等のマップは、無償で配付されているので、入手すると、「一気に千住の歴史通になれる」。サンロード入口角のインテリアハウス「ヤマザキ」、三丁目のパン店「EPIDEROUGE」では、外にマップスタンドが設置されている。



地域ぐるみで地口行灯

じぐちあんどう

地口とは、語呂合わせや馴熟落のことと言え。地口行灯は、江戸時代から続く、和紙に手描きで元の句（ことわざや芝居の台詞）を連想させながらも、全く別の言葉に置き換える。それに併せた絵が添えられているのが何とも楽しい「地口絵紙」を張り合わせてつくられたもの。千住では祭礼時に神社に奉納されていましたが、03年9月の千住の祭りに「千住五町会・連合青年部」の呼び掛けで拡がった。

その取り組みは、本誌16号でも紹介しているが、吉田晃子氏の手描きの絵にラミネート加工を施して頑丈な作りから、祭礼時はもとより年間を通して軒先に飾る店や家が増えて、今では千住の町景色に欠かせない。まちを散策しながら多数の種類を楽しめる。

北千住マルイの店内装飾にもなっているが、何と言つても珍しいのは「千住警察署」（千住1-38-83）の入口両側を飾る行灯で、も

千住のへそ

過去から現代、未来に繋げる何かを考えたい。今回の提唱は「千住仲組協議会」であるが、誰もが考へていることに違いない。

現在旧区役所跡地に建設中の「あだち産業芸術プラザ」横に出来るイベント広場に何か提案したいという話しが持ち上がった。というのも、そこは千住のほぼ中央に当たり、掃部宿（中組）と千住宿（北組）の境目、かつて千住宿の「問屋場・貢目改所」のあったところ、旧日光街道にも面している。斜前はかつて千住酒合戦が行われた中屋跡、ということで真先に出た案が歴史案内板であったが、それぞれの説明まで入れると巨大なものとなってしまう。話す中で行き着いたのが、床面にまさしく巨大な地図を載せるということだった。

歩ける地図 テクテクまつぶ

地図上に千住の歴史と現在、更に緊急時の避難場所まで書き込めたら、散策や子供達の学習にも役立つ、と足立区に相談する。横25メートル縦65メートルまでなら可能との見通しをつけて、千住大橋から千住新橋まで、旧道を中心としたもので企画した。色褪せず、耐久性のあるタイルをつくる会社を見つけることも出来たが、特殊なものだけに、費用は最もシンプルなつくりにしても一千円。

それ程の予算はどこにも無いのだが、千住に同心を持つ人々の持ち寄りで費用をまかなえれば、その試みは、より深い意味を持つ。

勧進元

千住仲組協議会+千住のへそテクテクまつぶ製作委員会

カンパ申込先

振込先 千住河原町郵便局 記号10020 番号98846501
センジュ ナカグミ キョウギカイ

この頁の問合先 TEL. 03-3870-7055(町雑誌千住)



地上22階建てとなる現在建設中のあだち産業芸術プラザ。来春には千住の新しいランドマークとなる

費用はもとより具体的な地図内容も、多くの人の知恵を結集したいと考えた。年内には発注を終え、来春には完成予定と慌ただしい。

千住の要部分を意味する「へそ」

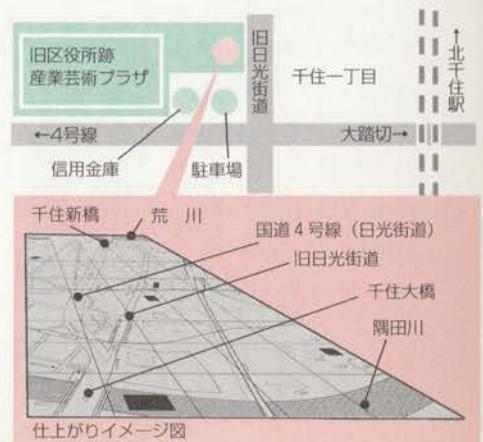
を冠した「千住のへそテクテクまつぶ製作委員会」

が立上がり、参加者を求めると共に、募金活動が始まつた。

カンパをした人は、同会が来年企画する平成版千住酒合戦に御招待の特典付き。

千住の心意気が、どのように結集するか楽しみにしている。

金額は自由だが、個人で二万円以上のカンパをした人は地図の余白に名前を載せる事ができる。



平成17年度 特別展
地口行灯の世界

会期 平成17年9月4日(日)～12月4日(日)
開館時間 9時～17時
休館日／月曜日(祝日の場合はその翌日)
足立区立郷土博物館
東京都足立区大谷5-20-1
TEL 03(3620)9393



■ 地口行灯
地口行灯はおまつりの時奉納され、神社の参道や鳥居などに飾られる。自宅の敷地内に稻荷を勧請して祀った「屋敷稻荷」に飾られることもある。江戸では「地口」と呼んだが、京阪では「口合」と呼んだ。地口行灯は江戸時代の後記に生まれたといわれる。たとえば京阪は「後の後悔 先にたたず」を「あの号外 役に立たず」と読みかえる、全く別の意味を持つ句に転換させる傾向があり、「鯉の滝登り」を「子犬の大刀のぼり」と読みかえるようなナンセンスは江戸の特徴といわれている。地口の題材となる「元包」は、ことわざ、流行の芝居のせりふ、歌舞伎の登場人物などから取材する。地口は一時期、大変流行したとみえて、地口のネタ本や地口集なども出版された。地口を読むのもひねるのも、俳句や川柳と同じ、江戸時代から続く庶民の文芸活動といえる。現在東京都内で製作されている地口絵紙は「江戸系」と「多摩系」とに大別される。「江戸系」の作者には千住四丁目の吉田絵馬屋がある。「多摩系」は作品には地口だけでなく川柳が多く含まれるという特徴がある。



LAND STAGE
KITA-SENJU
JOY FRONT

ランドステージ北千佳 ジョイフロント

お問い合わせは、フリーダイヤル
0120-77-4909

※携帯電話・PHSからでも通話料無料でご利用できます。
受付時間は、AM10:00～PM9:00です。

 株式会社青山メインランド 東京都千代田区内神田1-7-6

通常の子想圖は、画面を基に描かれていたもので、実際とは多少異なる場合があります。



「北千住」駅
徒歩

7
分

潤いのある生活を
満喫できる北千住界隈。
地上13階の眺望と
利便性を手に入れ
マンションが誕生！

これからも
期待大の
街じやな。

「隅田川」「荒川」二つの水辺に囲まれた北千住界隈。マイ北千住や複数の商店街を擁する北千住駅西口周辺は、近年、都内有数のショッピングエリアとして変貌を遂げています。

江戸時代に宿場町として栄えた土地柄、街のあちらこちらに江戸情緒が色濃く現存。俳人・松尾芭蕉の「奥の細道・紀行」の出発地として知られるほか、歴史を感じさせる「蔵」が多数残っています。

1万3千発の花火が華麗に夜空を舞う「足立の花火大会」。老若男女が散策を楽しむ「ウォーキラリー」。劇場や黒澤明映像スタジオなどが併設する芸術拠点施設「東京芸術センター」(2006年4月完成予定)。JR、東京メトロなど5駅5路線が乗り入れる北千住駅(つくばエクスプレスは2005年8月開通予定)。心にゆとりを与えるイベント、施設が目白押し!

北千住界隈だから味わえる粹。伝統を踏まえた古き良きモノ。快適性を導き出す進歩、発展。2005年、満喫生活を実現できるエリアに「ランドステージ北千住」シリーズが誕生します。

古き良きモノを生かし、
新しく発展していく
足立区北千住界隈。



ときどき歩、ドキドキ歩

キラキラ

写真／文 米津誠太郎

春から夏にかけて、少しずつ陽が長くなる。冬は低い所にあつた太陽が、あんなに高い所まで昇っている。光が満ちる季節がやってきた。散歩好きでなくとも、天気のいい日には外へ出かけたい。行つてきます、と外出すれば日差しが心を温める。そして何だか元気になってくる。

いつもと違う路地に入る

と、お店を発見した。いな

りずし屋さん。確かに近くには稻荷神社がある。

「へえ、知らなかつたなあ

……」でも古くからあるお

店のようだ。僕の場合、初安がつきまとう。一度は前を通り過ぎてから、また引き返す。暖簾は出ている。

まずは硝子戸越しに覗き込んでみた。女将さんらしき女性がいた。お茶を飲んでいる。調理台の上には材料が置いてある。

大丈夫のようだ。ガラッ

ドキドキしながら話しかけ

る。

「いらっしゃい」

「すいません： お稲荷さんください」

「いくつにしましよう」

「六つ（むつ）ください」

「はい、六個（ろっこ）ね」

こうして注文が通ると奥から旦那さんが出てきた。旦

那さんはお稲荷さんを作りはじめた。注文を受けてから作ってくれる。しゃもじ

でご飯と具を混ぜる小気味よい音がしてきた。女将さ

んがすっとお茶を出してく

れる。腰掛けでお茶を飲みながら待つ。

自分のための物を目の前で作ってくれるのは、とても

気持ちが良いものだ。作り手の顔が重なつて見える。

旦那さんや女将さんとも自然に話をする。旦那さんは昔の話を聞かせてくれ

た。こちらが聞き返すと、女将さんから分かりやすい

解説が返ってくる。お二人

の絶妙なコンビネーション。こうして話が盛り上がり

つってきたところで、お稲荷

さんが出来上がった。待つ

たといつても、五分くらい

だろうか。六個のお稲荷

さんを大切に持ち、家に帰つ

た。お店での出来事を話題にしながら頂く。とても美

味しかつた：

こうして書いていると、またお稲荷さんが食べたくなってきた。今度は八つ（やつ）にしようかな。女将さんに八個（はっこ）ね、って言われるかもしれない。ちなみに一人で全部食べるのではありません。家族で食べます。

荒川土手の緑は一層青々としている。風にそよいで、葉っぱが輝く。キラキラとした輝きが心地よい。ほんやりと霞んだ景色を背景に、その輝きが映える。土手でのお稲荷さんもいいなあと思いながら、今日もまた散歩に出かける。

姿を変える蔵・中



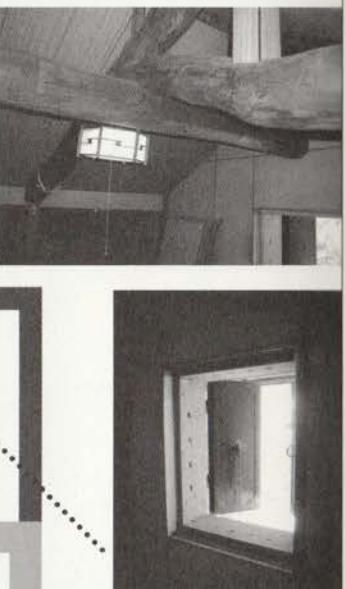
前号で紹介した明治33年の築、土蔵と煉瓦蔵の二棟が繋がれた阿部邸を、マンションに建て替え直前の04年夏に調査させていただいた内容をご紹介する。千住三丁目の絵馬吉田家と伝馬屋敷横山家の斜向かい、円通寺参道から正面に見えた大きな鬼瓦が、壁を覆う蔦と共にとても印象深い建物であった。



■2F■

煉瓦蔵2F

小さな階段を上がる奥の煉瓦蔵は、もとは質草の保管庫に刀剣や絵画のコレクションを納めていたという蔵の特徴がそのまま残る部屋。



土蔵2F

随分と手を加えたなかにも、天井に梁の一部が見えるように工夫されたり、窓や階段も、もとの姿が活かされている。



建て増し部分

バルコニーの南側にサンルーム



世田谷のボロ市は、区の民俗文化財にまでなっているが、

毎年十二月半ば代官屋敷を中心何百軒もの屋台や胡座（ござ）店が道両側に出て大変な賑わいである。それにつけても千住の夜店は、わずかに勝専寺だけである。

千住では、仲町の源長寺のお地

蔵様の縁日が毎月二

十四日、一丁目慈眼

寺のお薬師様の縁日

が毎月八日、三丁目

勝専寺の一月と七月

の十五・十六日の敷

入りはお闇魔様の縁

日、これらは近郷近

在にも鳴り響いた縁

日で、いずれも何百

軒もの出店屋台や

胡座店の夜店が出て

賑わっていた。

源長寺のお地蔵様の縁日は、源長寺入口の掃部堤から旧道両側を千住一丁目まで、昔の区役所通りにも広がり、その数およそ二、三百軒で一番の縁日。出店している店も毎月だから顔なじみ、ほとんど千住の人で、日中は屋台曳き売

夜店の楽しみ

安藤義雄

昭和十二、三年が全盛だったろうか、日中戦争が始まると、出征した人の噂も流れ、親たちはその一家を中心していた。普段一銭の小遣いも五銭、今日は何を買おうかと楽しみだった。驚かすのは区役所前通りの暗がりでやるバクダン、ポップコーンである。鉄の圧力釜をアセチレンガスのバーナーで熱し、長い金網の筒へ大砲のよう撃ち出す。ドカンとこれが気持ちいい。陰にうずくまるのは泣き売の金ベン屋、工場が火事になり、焼跡から金ベンの万年筆を持ってきたとい

い、真っ黒な土の塊から万年筆を取り出し磨くと新しくなる。蓋を取つて金のペン先を見せる。いつもやっているから子どもでも信頼があるのだろう。大好きだったのは小型のドーナツ、捏ねた生地をちぎって大鍋で揚げ、掬いとつて

砂糖の山にあけ混ぜる。紙袋にいれて食べながら歩いた。買わないが店前で待ち構えていたのが、板チョコのぶつかき屋、ホーロー引きの大きなパットに流し固めたチョコレートを、口上よろしくノミと金槌で欠き目方で売る。厚みがあつて近く時に破片が飛び散る。それを台の上から拾つて逃げるのである。破片が大きいと親爺が怒鳴る。

五目並べと詰将棋は、サクラが困んでカモを松、誘われて首を突っ込んだ男に教えてやりたいが相手が悪い。いつも聞きほれたのは七味唐辛子の口上、誰も聞いていないのに端から薬味を調合しぶつぶつ言つて休まない。「両国は薬研堀中島本店、今晚出張つてのお願い、甘い辛いはお客様のお好み次第、まず初めは武州川越の黒胡麻、お次は紀州蜜柑の陳皮、江戸は内藤新宿の焼唐辛子と讃岐は高松名産の唐辛子、静岡朝倉の粉山椒、加える小粒は大和の芥子の実、最後は日光の麻の実と揃つたところで混ぜますと香り粉々、びりりと食欲増進、無病息災、さあさあ、薬研堀の七味唐辛子」これは覚えて、お年玉を稼いだ。

解体作業の忙しい中、調査道具一式を担いで伺った私達に全面的に協力して下さったご好意は嬉しかった。藏の中に入るとうだるような暑さが少し引く。内部は土蔵を中心にレンガ造の藏や木造の建物が増殖するよう建てられていることが良くわかる。千住の歴史を物語るひとつの貴重な建物に触れ、調査できただことに感謝したい。



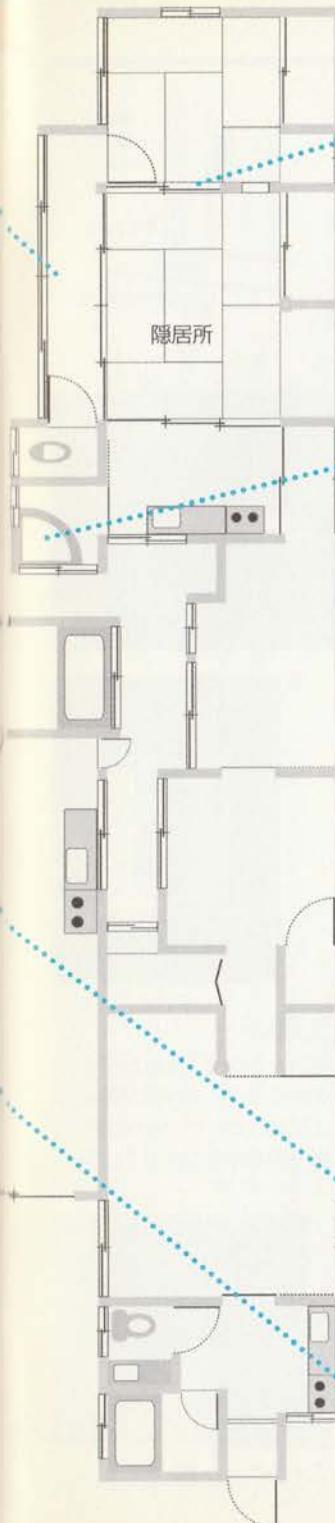
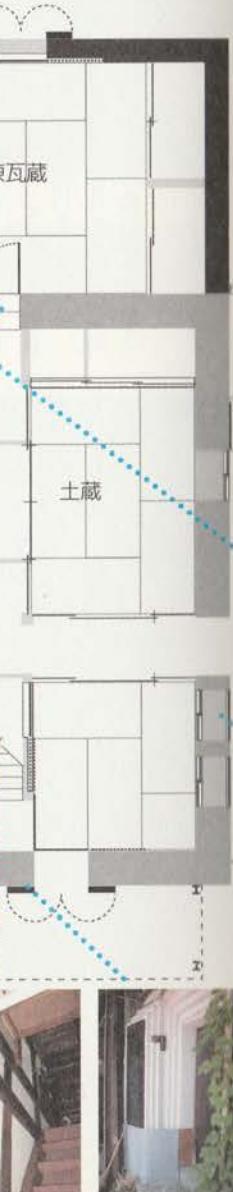
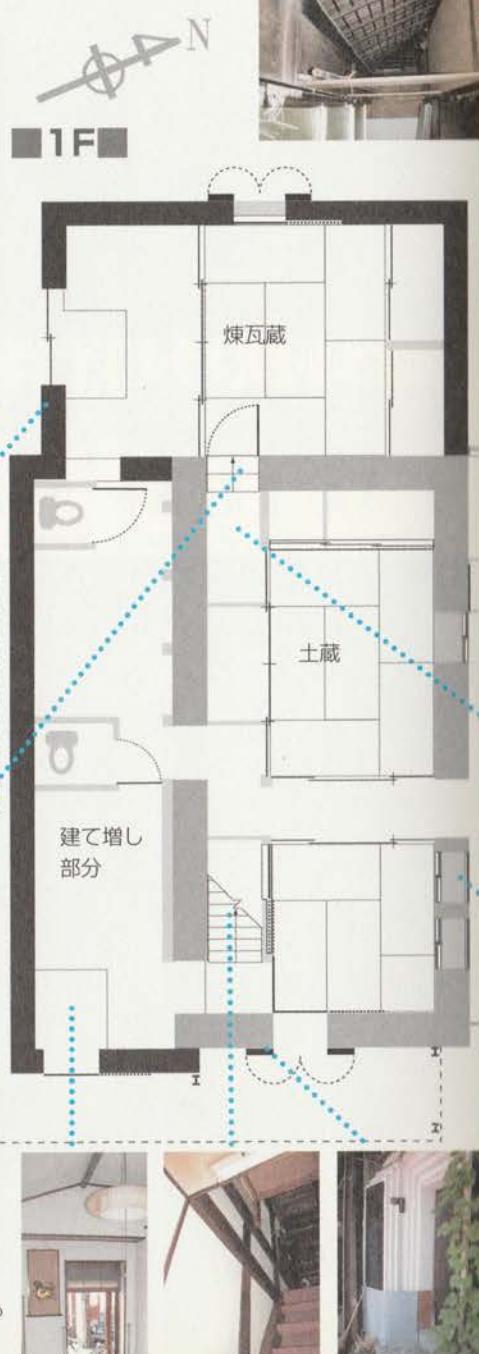
表通り、旧日光街道に向かう細い路地



煉瓦はイギリス積みという工法

藏と蔵を繋ぐ通路。アーチのしつらえが楽しい

建て増しされた玄関も船底天井。外に煉瓦塀の名残りが見える



2つの和室に挟まれた壁には三日月形の窓があり、見ているだけで優雅な気持ちにさせてくれる



扇形の浴槽が懐かしい



御影石の続く路地



電球に乗っていたガラスの笠は箱形の火鉢と共に、なかださんのアトリエ蔵に引き継がれた



グッドアイデア
土蔵の壁の厚み45センチを利用してつくられた戸棚は、引き戸も背面もガラスで、明り取りの役目も兼ねてている

千住のいえ

上
徳島屋

04年12月の千住・町・元気・探険隊の千住まち歩きに参加した、目黒区在住の南貞子さんから、生家といふ千住「徳島屋」の貴重な写真を幾葉か見せていただいた。八十代になつても、歩く様子は美しく達者で、個人でも千住にはよく散策に来るのだと仰る。千住のことにも詳しい。

「河合花白酒」の本家に当る「徳島屋」は南さんが七歳の頃に店をたんだ為に、やがて千住を去ることになつてしまつたが故郷として格別の思いがあると伺つた。写真にある帳場の横に掛けられた帳面には、河合善兵衛の名前が読み取れる。磨きあげられた建具の棟や調度に、つくづくと和の美を感じる。

右下に「東京北千住中組 千柳館」とあるのは、現在千住一丁目にある柳下写真館であるが、当時の写真館は戦災にあって、この時代の写真は残つていないという。写真是、江戸末期に河合欣三郎が千住で醸造業を始め、以来四代続いたという酒類販売業「徳島屋」の店奥である。通りに面した店は袖蔵を伴つ蔵造りで、場所は現在「Topos」のあるあたりとのこと。森鶯外の旧居「橋井堂」と隣接している。自由主義思想家として知られた河合榮治郎（明治一四～昭和一九）の生家でもあり、南さんは姪にあたる。

次号では、残る写真と共に南さんのお話を、更に詳しくお伝えしたい。

千住タイムトラベル 10

この連載は、千住の町を西へ東へ歩くだけでなく、少しおとぎ話も交えて、過去へも歩いていただくための道しるべです。

■あの頃の音、声、匂い 其の一■

千住の朝の活動がはじまるのは早い。ポップー、ガチャン、シュー、シューと貨車の入替え作業がはじまる。北千住駅は常盤線の都内唯一の貨物専用のホームがあり東武線の荷物貨車との相互乗り入れもあった。昭和十年頃までは引き込み線は電化されてなく小型の蒸気機関車が入替え作業をしていた。朝の静けさをうちやぶる音は大変なものだった。又蒸気機関車から出る煙と匂いも風の方向によっては町の中心地まで拡がった。またその頃になると上野発の一番列車、茨城方面からの上りの列車があいついで駅に着きその発車の汽笛や轟音が町中にひびきわたった。ブオーの発車音は特にすごかった。町中が寝静まった深夜（二時）頃に長く連結した貨車を引く蒸気機関車のボー、ボーと哀しげな合図をして荒川鉄橋を渡り、ガタン、ガタンの車輪の音は遠く木本、保木間の辺りまで聞こえた。昔の深夜は現在と違い本当に静かだった。国道（4号線）も朝4時頃から草加、越谷方面から牛車が肥桶を積んで都心に向かう荷車が列をつくり、ガラガラと音をたて通る。手拭で顎被りをし絆の着物に手甲をつけ赤い前掛けをした農家の娘さんが牛車の手綱をとっていたのが印象に残る。又千住のヤッチャバに野菜を大ハ

車でガラ、ガラの音、セリのかけ声が朝早くから橋戸、仲町方面から聞こえてきた。市内電車もその頃になると動き出す。六時までは割引運賃で市内全域まで行けた。荒川放水路と隅田川を航行するポンポン蒸気船がなつかしい。最近まで航行していたが数はすくなくなった。その名の通りポン、ポンと煙の輪を吹き出しながら自分の船の三倍もある伝馬船（肥船）を三隻も引いてゆっくりと力強く引いてゆく姿は頗もしく見えた。ポンポン響く音は南風にのって遠く伊興や舎人方面まで聞こえたとのことだ。西新井橋が木橋であった当時、道路は鋪装が悪くところどころ穴があり穴から川面が見えたこともあった。その頃本木関原方面のバタ屋さん（集団回収業）がガラ、ガラと大八車に大きな箱を積んで都心にゴミ集めに行く姿はたくましく見えた。夜で手朝帰りの車が西新井橋の橋上で一緒になって荷車のラッシュで大変賑わった。北千住駅前通りが開通したのが昭和6年で開通当時は車が少なく子供達はキャッチボールで遊んだ。時たま通る自動車のガソリン排ガスに人気があり車が通る度に車を追いかけ排ガスを嗅いで喜んでいた。（この頃まだまだ続きます。）

（写真・文：石坂満／郷土写真家）



けさとは打って変わつて、夜になるとどこから出てきたのかというくらいの人、人、特に元気な子供たちで溢れ、これからも商店街は活性化していくるという可能性を感じました。ちなみに、やぐら太鼓は「町雑誌千住」の大野康子さんが叩いて・いや、太鼓は「打つ」ものでしたね、編集長！こんなに盛大なお祭りが緑町で行われているのをはじめて知りました。

ズームインスープ 東京旅物語

(日本テレビ 5/17~19)

全国区のズームインスープで、朝早くから一週間連続で千住が取り上げられました。

しかし報道番組の宿命か、とある事件が勃発し、日程がずれて見逃してしまいました。

5/17あちこちや・かつばれ踊り

あちこちやは創業大正6年、かつばれ踊りは「和風工アロビクス」と呼ばれて人気とか。本当かな？

5/18 増英の千住揚げ・石黒のあめ

増英にはよく鍋を持つておでんをまとめて買いました。美味しいです。ネギとアサリをたっぷり入れた「千住揚げ」が名物です。石黒のあめは、12月に開催したまち歩きで、参加者へのお土産にしたところ、大変喜ばれました。しつこい甘さではないんですね。店主の増田裕さんは、100gがわかる黄金の右手をお持ちです。

5/19 大黒湯・喜田家・なかだえりさんの蔵
大黒湯は、なんと言つてもその風格がN.O.1。喜田家の銘菓「藏めぐり」のパッケージは、本誌でもお馴染み、なかだえりさんが描いています。

首都圏ネットワーク

旧宿場町の路地裏散歩 (NHK総合 10/26)

元気ハラツ・女性ハワー (NHK総合 11/30)

リクエスト編 (NHK総合 12/7)

これも報道番組。新潟中越地震が発生し、一回目と二回目が一ヶ月開いてしました。

10/26 槍かけだんご・喫茶蔵・江戸刺繡

一回目はアド街ック的定番ポイントを押さえた内容でした。

11/30 なかだえりさんのイラスト・駄菓子屋のおでん・美顔サロン

二回目はちょっと変わった切り口で、千住では女性が元気、というテーマです。顔パックの女性が並ぶ様子は、千住のNHKとしては斬新でした。

12/7

一回目と二回目をまとめて編集し直し、最近の話題として、ルミネ駿馬場の壁画について紹介しています。



「ふるさと新遺産」(NHK総合 5/8)
日本各地にある珍しいもの、不思議なもの、新遺産として登録する価値があるか、ゲストの多数決で決めるという番組。
その中で、元宿小にあるすべり台は、千住火力発電所にあった「おばけ煙突」を切り取つたもの。地元の人たちや、元宿小PTAのみなさんの懐かしいお話を聞けます。クライマックスは、元火力発電所でおばけ煙突を14年間補修していた深柄智夫さんが40年ぶりにこの煙突(すべり台)に再会し、感慨深げに眺める目には光るもの、というシーンです。
判定は全員がYES。明治大学教授の齊藤学さんの意見が面白かったです。「すべり台としては(傾斜が急で)危なつかしいのがいい。子どもはこれを落ちる(すべる、じゃなくて)たびに、「これは普通のすべり台じゃないな」と誇りを持って落ちて(すべて、じゃなくて)ますから」。

「ぶらり途中下車の旅」

(日本テレビ 8/14)

滝口順平さんの軽妙なナレーションでお馴染みの番組、この回は俳優の三浦浩一さんが北千住駅で下車し、鮎弓(まじ満)、鮎垣(木工芸)という三軒を訪れます。鮎弓さん、まじ満さんは地元でも知名度は高いですが、竹垣さんに突入したのは、ジモビー(地元の方々)をも喰らせるナイスな選択だったと思います。

余談ですが、三浦浩一さんの奥様は「ママはライ

まだまだ続く情報の05年版は

次号でご紹介！



05年5月22日千住1丁目で
NHKの撮影を目撃

「生放送」
足立情報タイム 530
ケーブルテレビ足立・月曜・金曜
この番組は、ほぼ毎日が千住のNTV
Vなので、詳しくは取り上げませんが、すこしだけ紹介させていただきます。
12/12に開催した「千住の今を歩こう！」が放送されました。これは我々「千住・町・元気・探険隊」のまち歩き班が主催した吉例行事に同行し、取材されたものです。あいにくの天気でしたが、参加者も我々も楽しい一日を過ごせたことが画面から伝わります。

また、なかだえりさんの駐輪場壁画、勝寺の祭り、地図行灯、宵宮など、身近な話題を取り上げてくれるので、とても楽しく拝見しています。ただ、夕方5時半からの生放送は見られないでの、8時から10時の再放送しか見たことがありません。タイトルを見るたびにすこし変な感じです。

「生放送」
足立情報タイム 530
ケーブルテレビ足立・月曜・金曜
この番組は、ほぼ毎日が千住のNTV
Vなので、詳しくは取り上げませんが、すこしだけ紹介させていただきます。
12/12に開催した「千住の今を歩こう！」が放送されました。これは我々「千住・町・元気・探険隊」のまち歩き班が主催した吉例行事に同行し、取材されたものです。あいにくの天気でしたが、参加者も我々も楽しい一日を過ごせたことが画面から伝わります。

また、なかだえりさんの駐輪場壁画、勝寺の祭り、地図行灯、宵宮など、身近な話題を取り上げてくれるので、とても楽しく拝見しています。ただ、夕方5時半からの生放送は見られないでの、8時から10時の再放送しか見たことがありません。タイトルを見るたびにすこし変な感じです。

目が離せそうにありません。



神保町駅すぐ
千代田区神田神保町2-2
tel 03-3261-4957

新・千住²人スケッチ

4

東2丁目の作業場なおうち



英次郎くんは、東京芸術大学で建築を学んでいる学生さん。ひとあたりのやわらかい22才の好青年で、この春から大学3年生。千住暮らしあと1年半になります。

英次郎くんが暮らす家は木造2階建ての一軒家で、千住東2丁目の路地奥に建っています。



間取りで言ったら2DKでしょうか。風呂キッチントイレ付で家賃は6万円。千住で一人暮らしする場合の相場を考えたら、これはかなり破格でお得！なおねだんです。

安いにはやはり理由があって、なかなか年季の入った味わい深い家もあります。

あちらこちらに、改築や増築を重ねた様子が見られ、いろいろな年代のものが集まったつぎはぎ建築物。この、新と旧がこだわりなくまざっている感じは千住らしくていいなあ、と思います。

築年数は聞く人によって築30年とも70年とも言うそうですが、実際のところはよくわかりません。もともとは、6畳の和室2室と階段下に和式トイレがあるだけの、とっても小さな家だったようですが、現在は、1階に下屋やダイニングキッチンが増築され、なんと小さなユニットバスまであります。

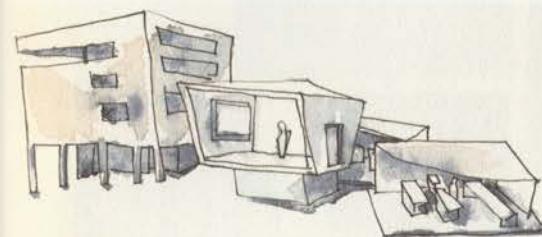
家の間仕切り壁に外壁用の木製サッシュがはまっていたりするところは、増築された家によく見られる面白いながめです。



英次郎くんが千住に住み始めたのは大学に入學して半年くらいたった秋の頃。それまでは、千葉県野田市の実家で家族と一緒に暮らしていました。

芸大の本校舎は上野にあるものが有名ですが、建築学科入学1年目の学生は、取手の校舎をメインにして学ぶそうです。

そう、千住は上野と取手の間にありますので、二つの校舎を行き来するには非常に好立地。なのです。



英次郎くんが1年生の頃には、野田市から30キロメートル離れたその取手の校舎まで、なんと自転車で通っていたそうです。普通に漕いで行くと1時間半、とばしても1時間10分はかかるそうで、それを毎日とは・・・さすが若い！

その、青い長距離用の自転車、今では玄関の小さなたたきに誇らしげに置かれています。



とりやま
まさこ

千住から上野に通学する現在は、わざわざではなければそんなに長い距離を走ることもありません。でも、今でもごくたまに、自転車仲間と夜の東京を走り回ったりしているそうです。車も人も少なくなる時間、夜の4号線を使い、すばっと都心にでて、真夜中の皇居の周りをぐるぐるはしっている英次郎くん、なかなか素敵な楽しみを持っていますね。



英次郎くんにとってこの家の絶対的に重要な部分は、「作業場」として使えるところです。一軒家なので、昼間なら多少音の出る作業も周りを気にせずに行えますし、大好きな音楽も思い切りきくことができます。

ものづくりが本当に大好きな英次郎くん、家の中にある棚たちはほとんど自作だそうですよ。玄関にはさりげなく電動のこぎりが置かれいて、工具箱にはかんなが2丁ありました。他にもいろいろな工具を持っています。なかなか玄人的。

なんと家の外にも専有で使える小さな土間スペースがあり、とってもぜいたく。英次郎くん、これからは革製品を作成みたいそうで、本格的な革用の工業ミシンも購入済み。

隅田川をわたってすぐの、山谷のあたりには、革製品関係の工房やお店がたくさんあるので、そう言う意味でも東町に住んでいるといろいろと便利だそうです。

建築だけにこだわらず、いろいろなものづくりに貪欲にチャレンジしていく英次郎くん。作業場仕様のこの家はまさに「ものづくり基地」です。ここからどんなものたちが生まれてくるのか、とっても楽しみです。

皆町町
さのま
くのく
応のん
援皆は、
参さ
加ま
を一
緒に
しつ
くり上
げて
いる
雑誌
です。
。だ
い
て
いる
お
店
の
ご
協
力
…と、

応援参加会員のお願い

- 購読応援会員 年会費3千円以上（各2冊3回配本・送料、手数料込み）
- となり組応援会員 年会費6千円以上（各4冊3回配本・送料、手数料込み）
- 心意気応援会員 年会費1万円以上（各5冊3回配本・送料、手数料込み）
- 法人会員 年会費3万円以上（各10冊3回配本・送料、手数料込み）
- 心意気応援会員は紙面でお名前を、法人会員は社名他を紹介させていただきます。
- 2口以上のご協力、500円からのカンパも歓迎

会員になっていたらお近くの郵便局から下記までご入金ください。入金確認次第、会員登録させていただきます。名前、郵便番号、住所、電話番号のご記入を正確にお願いします。【郵便振替口座】00140-4-103836（町雑誌千住編集室）

会員になってくださった皆様ありがとうございます

足立区観光協会	あやめ寿司 本店	石原 捷恵	一 初	伊藤隆太郎
上木 恵子	うなぎ千寿	(有)裏方多聞堂	奥乃丸伸之助	紙谷 衛
喫茶 蔵	鯨岡 亘	久保田生花店	金 藏 寺	日本茶カフェ 茶 翁
坂本税理士事務所	笹木美奈子	塩島 莞爾	清水 正雄	白土 徳一
新日本百年茶	スペースエイド	千住ファーマシー	千住本氷川神社	高見澤康夫
鳥 真	中島 勝正	波多野 純	日比谷松夫	堀内 延浩
松田季美子	マツマル	宮田 一男	酒のモトハラ	柳原ほん太
よしだや	吉田 忠司	ラーメン70番	若林登紀子	(敬称略、順不同)

コミック3万冊ゆったり80席
まんが喫茶
営業時間 平日AM10:00~PM11:00
日祭AM10:00~PM10:00
TEL 03-3879-7532
イト-ヨ-カ堂となり柏光社ビル4F

東武旭町歯科医院
削らないのに白い歯になれる
TEL 3888-3971
北千住駅東口
足立区千住旭町4-1-10

カンパをしてくださった皆様
ご協力くださった皆様
ありがとうございました

♪次号VOL.20♪
特集は
千住のお化け

といわれて思わず連想するあの「お化け煙突」。
いまだに千住のシンボルとされているその魅力を
さぐります。
お楽しみに！

人が好きです……この街が好きです
不動産のことなら
YAMAZAKI
Housing なんでもご相談ください
(有)山崎ハウジング
足立区千住1-18-4
TEL 3882-2324(代)
http://www.yamazaki-h.co.jp

資**トラヤ**
オフィス用品・OA機器・デザイン用品
千住旭町40-27
TEL<03> 3888-5526
E-mail: toraya@adachi.ne.jp

町雑誌「千住」 VOL.19
発行 千住・町・元気・探険隊

編集 町雑誌千住編集室 編集人／大野順子
町雑誌千住担当 板橋陽子 岡崎一子 川上佳子
〒120-0044足立区千住緑町2-33-23 TEL 03-3870-7055 FAX 03-3882-5845

千住・町・元気・探険隊HP: <http://1010tankentai.fc2web.com/>

千住のヒト・モノ・コト、千住の情報を寄せください。

町雑誌千住はここで買えます！お近くのお店でお求めください

●千住旭町／アサヒ書店 旭町歯科医院

喜田家ルミネ店 とんかつもりき 丸善

ら・があるルミネ北千住店 よしだや ●

千住東町／ヘーサロンノヒラ●柳原／ゑ

びす屋 ●千住一丁目／喫茶蔵 コバガ

デン 焼かつつくし 椿屋 日の出屋 前田

クリーニング店 山本園 ゆうらいく ●千

住二丁目／五味鳥 千住の永見 ぶっくら

んど ●千住三丁目／珈琲物語 メンズギ

ヤラリー福田 渡辺優文堂 紀伊国屋北千

住丸井店 ●千住四丁目／五門 酒の花栗

屋 ●千住五丁目／梅の湯 ラ・ルミエール

●千住大川町／ホシノ理容室 山口書店 ●

千住寿町／大黒湯 ●千住元町／タカラ湯

モ力 ●千住桜木／穂高 ●千住柳町／一や

なぎ 金乃湯 ニコニコ湯 ●千住竜田町／

アリス 喜田家本店 ●千住中居町／北嶋

書店 コロラド ●千住宮元町／高原書店 ●

千住仲町／小桜湯 まじ満 ●千住河原町／

不動産のカサマ ●千住緑町／魚源 オリ

ーブ しずか屋 中村屋 パレット 丸安

青果店 ●千住外／喜田家五反野店 喜田家

竹の塚西口店 喜田家梅島店 富士ブック

ス五反野 小泉書店 ブックステーション

小泉 ブックスひでき 書肆アクセス

バックナンバー販売店

アサヒ書店

笠間産業

喫茶 蔵

北嶋書店

紀伊国屋北千住丸井店

高原書店

ぶっくらんど

丸善がある北千住ルミネ店

渡辺優文堂

書肆アクセス(神保町)

通信販売取扱店

ピーアンドエス

TEL 03-5808-1278

FAX 03-5808-1279

Email:
senju1010@10ants.com

VOL. 1 千住の祭

VOL. 2 銭湯めぐり

VOL. 3 飲み処食べ処

VOL. 4 千住宿を遊ぼう

VOL. 5 千住の餅菓子屋

完VOL. 6 映画文学の舞台となった千住

前編

VOL. 7 映画文学の千住

後編

VOL. 8 千住手仕職人の世界

VOL. 9 千住の年中行事

VOL. 10 ネコの眼路地歩き

千住の年中行事

VOL. 11 きいちのぬりえ

千住の年中行事

VOL. 12 千住の魚河岸

VOL. 13 荒川 PART1

VOL. 14 ランチ PART1

遊廓があったころ

VOL. 15 ランチ PART2

VOL. 16 江戸四宿

VOL. 17 千住の肖像

VOL. 18 千住を往く

常東編PART1

VOL. 19 千住の仕掛け



編集後記

■千住にどっぷり浸かっている今の自分、これには必然的なものを感じますが、これまでにたくさんのが重なつて今に至るわけです。「必然」とは、最初は「偶然」の仮面を被つてやってくるようですが、これまでにたくさんの偶然が重なつて今に至るわけです。(ひろせ) ■以前は読者でした。大好きな千住の町ともっとつながりを持ちたいと思い、今号から参加しています!(よねつせいたろう) ■蔵が姿を消すこと寂しいことですが、これは町が新しい方向へ動き出している証拠でもあります。ひろせ) ■川越の蔵を見に行きました。空が広いのでびっくりしました。家つくばがますます近くなるのスケートが開通しますね。千住と実家つくばがますます近くなるのできました。空が広いのでびっくりしました。写真を見て、千住のまちに背の高い建物が増えたことに改めて驚いています。もともと千住の一帯の魅力だった新旧対比が、良い展開になりますように。(J) ■最近、寒天にはまっています。毎日いろいろな味で楽しんでいます☆(や) カット/大野順子

つくばエクスプレス開業おめでとうございます!

北千住マルイは リニューアルオープン



OIOI 北千住マルイ

〒120-8501 足立区千住3-92 ☎ 03(5244)0101

営業時間 午前10:30 ▶ 午後8:30

